

人づくりと

幼稚園の役割

友田 静 恵

最近、人づくりということがよくいわれる。これは、池田首相が「人づくりは、国づくりの根幹である」と強調し、青少年教育を重視したためである。しかし、ふたは時代の人づくりを軽視しては、よき国づくりはなされないといいすぎではない。

昔から「三つ子の魂百まで」といわれ、幼児期の教育が重要視され、家庭でもしつけはある程度きびしいものがあつた。それが敗戦と同時に、アメリカの教育思潮が強くなり、自由主義教育が徹底したため、自己主張のみ強い、いわゆる「現代っ子」といわれる子どもたちが生れた。最近になり

ようやく、それではいけないという反省がなされるようになった。そのひとつのあらわれとして、人づくりにスポットがあてられたのである。

今いわれている人づくりは、いわゆる産業界技術面の人づくりが、主としていわれているようである。この面の教育が緊急を要するとされているが、もっと根本的な人づくりは幼稚園教育でなければならぬと思う。最近には特に幼稚園教育がみなおされ、ことしの入園希望者は、東京都内の公私立幼稚園をみても定員を上まわり、入園できなかった幼児も多数にのぼる状態である。困はこの実情を知って幼児教育にもっと力

を尽すべきであらう。幼稚園こそ、人づくりの不在の手であるといってもいいすぎではない。

幼稚園教育と家庭教育

最近はその性格が逆になった感がある。入園面接のとき、父兄に「幼稚園教育に何をのぞみますか」という問に対して、「この幼稚園はしつけがきびしいとききました。家庭ではなかなか思うようにしつけができませんから、ぜひこの幼稚園へ入れて立派な人になりたいと思います」という答。まるで人づくりは、幼稚園の専売特許みに考えている。また、幼児に「きょうはお顔をたがが洗いましたか」という朝の視診のときの発問に「ママにふいてもらったの」「どうしてひとりで洗わないの」「たって、じゃうずに洗えないの」「洋服の袖がぬれるから」などの答えである。そのくせ、「先生、ぼくね、英語ならってるの」と得意顔にいいふらすのもこのごろの傾向である。このように家庭は知識を授けるところ、幼稚園はしつけをすることと、逆になった感じである。これは幼稚園側としても、家庭に反省をうながし、家庭教育本来の姿に

もどってもらおうようにしなくてはいけない。そして幼稚園では、個々の子ども個性に応じながら、集団の一員としてのよいしつけをしていくことがたいせつであらう。

そのしつけは、現代社会の要求によって理想像がえがかれ、理想とする人間像に、一歩一歩近づけるような教育をしなくてはならない。

よい子の理想像

子どもを育てるのに何がいちばんたいせつかかといえ、どういう子どもに育てたいか。よい子とは、どんな子どもかというよい子の理想像を、まず明確にしておく必要がある。この理想像についてはいろいろの研究会で討議されているが、よい子とはこんなものだという決論はむずかしいようだ。それはなぜかという、時代によって地域によっても要求される理想像がちがっているからである。

- 池田首相は、人づくりの柱として次の五つをあげている。
- 1 健康、2 勇気、3 自由、
 - 4 有能、5 創造力

この五つの要素をかねそなえていれば現在のよい子の理想像としてびったりである。

では、この要素を、どんなときに、どんな場で指導していくかについて考えてみよう。

まず、五つの柱を幼児の生活にふさわしく、六つの領域に普遍してみよう。といっても、幼児の生活は総合的、全体的であるからはっきりわけられないと思うが。

健康は現在の領域をそのまま生かし、健康な生活ができるように、しつけ的な面と、健康増進という積極的な面を強調していけばよいであろう。

勇気、このことは戦後の学校教育では割合い、かすんでいたように思える。戦前には、忠君愛国という修身科の徳目として学習されていたが、平和国家になってからはあまり要求されなくなったようだ。昔は「義をみてせざるは、勇なきなり」といわれ、人間形成のうえにたいせつな要素となっていた。このことは国家という大きな立場からだけでなく、人間として生活していくうえにもたいせつだと思ふ。さて、こ

の勇気をいつどんなときに身につけさせるかが問題になってくるが、幼児の生活からみて、健康の領域で、体育的な遊びをとおして養成したり、あるいは社会の面で、そのような場をみつけて指導することが望ましい。とかく、最近では、自分に利害関係さえなければ、他人が困っていても助けようとはせず、かえって災難が自分の身にふりかかるとはと、みてみないふりをする風潮さえある。これは積極自分さえなければという個人主義のへい害でもある。

自由、このことについても同じようなことがいえるのではなからうか。現代っ子は、自由だ、自由だと自分の主張や権利は強く要求するが、他人の立場とか幸福についてはかえりみようとしない。だから戦前ほど人間同志の結びつきが強くないように思われる。したがって、このことも围づくりのうえに大きな支障をきたしているように思える。

個人の人權を尊重するという、教育基本法のたてまえを生かし、自由の本質を幼児にわかりやすく、具体的な場で指導していくことがたいせつである。具体的な場とは

どんな場かという点、幼児の生活全体をとおしてである。遊び、学習、家庭生活の中で、自由にふるまえる場とそうでない場を経験をとおして知らせたいものである。

有能。幼児は、それぞれによい面、いたらない面をもっている。それは素質によりこれまでの育てられ方によりちがっているが、教師は個々の子どもの能力を知って、それをじゅうぶん伸ばせるような環境をととのえて、指導をしていかななくてはならない。そのためには、幼児というものはつきりつかむことである。心理学者の本を読むこともよからう。しかし、その理論に押しながされてはいけない。幼児は刻々に成長しているのである。だから理論を過信して幼児を見失なつてはいけないということである。ある作曲家の話である。さる有名な音楽リズムの先生から作曲を依頼された。その要望として、幼児の音域はきわめて狭いものであるから、3度から5度度までの音域で作曲してほしいといわれた。しかし、現在の幼児は、テレビの発達で相当音域の広いコマーションソングでもマスターしている。だからこの先生の考え方は古

いというのである。このようにマスコミからうける影響も、幼児の人間形成のうえにのみがせないものがある。だから教師は、なまの幼児の姿のうえに、指導の手だてを考えていかななくてはならないと思う。

創造力。このことは最近の教育では特に重視され、これまでの示範をする教育は影をひそめたようである。しかし、まだ一部には十年一日のごとく、模倣を基盤としての教育がすすめられているところもあるようにきいている。幼稚園教育要領にも、音楽リズム、絵画製作その他の方法で創造的表現力を養うとある。したがって、適切な環境をととのえて、幼児のうちにある創造の芽ばえをのばすように、いつそうのくふうをしたいものである。

人づくりとしつけ

人づくりは一朝一夕にはなされない。やはり乳幼児期のしつけが重視されなくてはなるまい。

「しつけ」とはどんなことか、「しつけ」ということばからうける印象は「行儀のよい子どもにする」というようにうけとれるが、それは、形式にとらわれるものであつ

てはならない。

「知った人にあつたら、おじぎをしましう」といわれて、機械的におじぎをする、首ふり人形をつくるのではなく、なぜおじぎをするのか、という精神面のしつけをしていくところに、人間的しつけの意義がある。

昔は、人づくり的しつけをする修身科があり、この中で徳目をならべて、何学年ではこんなことをとはつきりした指導があつたが、戦後はこれがなくなつた。四、五年前から、文部省では道徳教育の時間を特設して、この中で道徳指導をすることになつた。しかし、それも週のうち、何年生では何時間ときめられているので、こんな少ない時間の中で、だいたい人づくりはできないと思う。

幼稚園では学校教育施行以前から、全人的な教育の立場に立って、生活指導即道徳教育をしているから、いまさら人づくりだ、しつけだとあわてなくてもよいと思う。が、一部の幼稚園では今だに自由保育だ、自主性尊重だと、しつけの焦点がぼやかされている園もある。だから学校生活に

はいっても、四十五分の授業時間中みんなといっしょの学習態度がとれない子どももいるとき。こんなことではよき人づくりはできない。やはり、その時期でなければできないしつけがある、ということをお肝にめいじて、道徳的心情や態度の育成につと

めなくてはなるまい。このことが围づくりをなす根幹であると思う。

一方理想の人間像というのは、社会の要求や時代の推移と変転によってちがって行くので、教師は現代社会に対する深い洞察力と見通しをもってあたらなくてはならな

い。

結論的にいえば、新しい人間を育てようとするためには、それにふさわしい生活のしかたを、順序をおって育てていかなければいけないということである。

(千代田区立芳林幼稚園)

友田静恵氏の

所論についての感想

津 守 真

友田静恵氏より、右のような文をいただいたので、私もいささかそれについて感想を付け加えることをおゆるしいただきたいと思う。

最近言われるようになった人づくりというところが、青少年問題に対する健全な政策を推進させることに役立つならば、大へん結構なことだと思うし、また、幼児期の教

育がこれらの一連の問題の基礎をなすことについては私も異論はない。この機会に、大いに衆智を集め、予算をとって、児童問題や乳幼児対策が一步前進することを願っている。

ただ、いちいちの問題についての具体的な考え方や、方法については、大いに研究して進めなければならぬと思う。たとえ

ば、いわゆる現代っ子が自己主張が強く他を顧みないという傾向があるとしても、その理由として、戦前には家庭できびしいしつけをしていたが、戦後にアメリカの教育思潮が強くなり、自由主義教育が徹底したために望ましくない傾向がいろいろとあらわれてきたのだというように、かんとんに解釈しては誤まりである。まして、だから

